



ドクター・ハザマの

バイタルサイン塾 23

次のステップへと導くバイタルサインの可能性

ファルメディコ株式会社
大阪大学大学院医学系研究科生体機能補完医学講座
医師・医学博士 狭間 研至

求められているのは「謎解き」ができる薬剤師 チーム医療にも必要なその知識

患者の状態が良くなったにしろ、悪くなったにしろ、その理由が説明できる、すなわち「謎解き」ができるということが、これからの薬剤師には求められていると思います。

その理論的背景が、医学でも看護学でもない薬学にあることで、薬剤師がチーム医療に参画する意義が出てくるでしょうし、それをチーム医療に携わるメンバーが身をもって理解すれば、薬剤師が真の意味でチーム医療の一員になるだろうと思います。

今の薬剤師の業務のほとんどが、医師の処方せん(病院では処方オーダー)を受ける調剤業務で占められていることを考えれば、まずは、自分が調剤した薬の効果や副作用の発現の有無についてチェックするところから始めやすいところでしょう。その上で、患者の状態を「謎解き」し、それらの結果を次回処方の前に医師と共有することができれば、処方の中身(=薬物治療の方針)に医師と薬剤師の知識が生かされるようになるでしょう。

もし、薬剤師が自分の提案が盛り込まれた処方が患者さんに実行されたとすると、きっと今まで以上に、患者さんへのファーマシューティカルケアに取り組めるのではないかと思います。



ポイントはやはり、調剤して服薬指導し、薬歴に記載して終わるのではなく、その後、患者のもとに赴き、患者の状態をバイタルサインなどの客観的データを踏まえて評価(フィジカルアセスメント)し、次の処方のさらなるチューニングへとつなげるということです。これは、まさに「共同薬物治療管理」と呼べる、医師と薬剤師の新しい連携になるはずで。

バイタルサイン等検査データがもっている 情報の重要性・可能性を再認識せよ

このチューニングの質と量を飛躍的に向上させるために必要なのが、血液検査のデータだと感じています。そもそも薬剤師は、ヒトの体に触れずに、患者さんの状態をアセスメントしようと努力を積み重ねてきました。そのためにはコミュニケーション能力を高める必要があります、その努力の成果はすでに出ていると思います。

しかし、コミュニケーションのみで得られる情報には限界があります。患者さん自身が気づけなかったり、患者さんが話したくないと感じたりするために、患者さんの口から語られない事実があるかも知れませんが、最近急速に増えている高齢者の医療においては、患者さん自身が認知症や脳梗塞後遺症などにより、ご自身で伝えられないという状況が増えています。

バイタルサインは、そういうコミュニケーションがなくとも、患者さんの状況を医療者が能動的にとることが可能なものです。もし認知症があって、体調が悪いということを伝えられなくても、体温や脈拍、血圧や呼吸音の聴診などによって、たとえば上気道炎の症状があるところへつなげることができるのです。

そういう風に考えると、血液検査のデータは、もっと鋭敏に、正確に、患者さんの情報を伝えてくれる可能性があることに気がつきます。